李香蘭と上海、香港

テレビ朝日元台北支局長、売文業　高橋政陽

2014年9月、香港の茶楼で

「李香蘭が逝ってしまったってニュースで聞いてから食事も喉を通らないのよ」

山口淑子さんの逝去公表から2日後、李香蘭とともに1940年代の「上海七大歌后（歌の女王）」に数えられた姚莉さんと2年ぶりに香港北角の茶楼で再会した。上海村との別名を持つこの街には、解放前後から多くの上海人が流れついた。ブラウスも杖も真紅の薔薇が数えきれぬ程あしらわれている。代表曲「玫瑰玫瑰我愛你（バラよバラよ、君を愛す）」に因んだおめかしだ。山口さんより2つ若い92歳。七代歌后のうち健在なのは彼女だけになってしまった。

「久しぶり。元気だった？」

姚莉さんを中国懐メロ好きの友人に紹介されて以来、香港を訪れる度にこの茶楼で飲茶をしては昔話を聞かせてもらっていた。

湯気を立てた熱々の点心を前にしても一向に箸が動かない。山口さんが元気だった頃、この茶楼から私の携帯電話で山口さんに国際電話をかけるのが常だった。

「姚莉、貴女の方が若いんだから東京に来てよ」と山口さんが言えば、姚莉さんは「私は足が悪いんだから貴女こそ香港に来てよ」と返すのがお約束だった。2人は、1967年に亡くなった姚莉さんの実兄、作曲家の姚敏の葬儀以来、会っていない。

「兄と李香蘭は上海時代から毎晩、飲んでは音楽の話をしていたわ。2人とも強くて夜通し。下戸の私はお先に失礼ばっかりだったわ」

姚敏は服部良一から西洋音楽を学び30、40年代の上海を代表する作曲家となって山口さんにも多くの曲を書いた。戦後、山口さんが映画撮影のために香港に訪れ、上海から香港に逃れた姚敏と再会、酒盛りは再開した。

姚莉さんは、生前の山口さんのことを偲んだ二晩、大事なことを思い出したという。

「ある時、兄が言ったの、李香蘭が好きだって。私も好きよって言ったら、バカ！　お前の好きと俺の好きは違うんだって」

姚莉さんが甘く切ないメロディーを口

ずさんだ。その旋律を耳にすると山口邸で戦後の聞き書きをしていた、ある夜のことが走馬灯のように頭をよぎった。

冬夜裡吹来一陣春風　心底死水起了波動
雖然那溫暖片刻無蹤　誰能忘卻了失去的夢
你為我留下一篇春的詩　卻叫我年年寂寞過時
直到我做新娘的日子　才開始不提你的名字
可是命運偏好作弄　又使我們無意間相逢
我們只淡淡的招呼一聲
多少的甜蜜　辛酸　失望　苦痛
盡在不言中

「この曲ご存じ？『恨不相逢未嫁時』って大好きな曲なの。漢文調なら『未だ嫁がざる時に、相逢わざるを恨む』よね。これを日本語にして『結婚する前に会いたかった』じゃ情感もないわよ」

その後は冗長で同じ時間の中に込められる意味では中国語に太刀打ちできない、と日中比較言語論になり、この曲に込められた山口さんの思いまで気が回ることはなかった。姚莉さんが続ける。

「兄だけじゃないのよ。陳歌辛も！それで兄が曲を、陳歌辛が詞を書いて自分たちの気持ちを伝えたってわけなの」

中印クウォーターの陳歌辛は姚敏と並ぶ上海を代表する音楽家である。七代歌后の多くの曲を姚敏とともに紡ぎだした。3人の間に一体何があったのか。

「兄も陳歌辛もその時すでに家庭を持っていたの。だから諦めたんでしょう。それが『恨不相逢未嫁時』という曲になったのよ」

50年代に香港のショーブラザースの映画撮影のため香港を訪れた山口さんと姚敏は上海時代と同様に夜明かしして飲み、帰宅しなかった朝があった。姚敏夫人は激怒して、家庭争議に発展。離婚の危機すらあったとか。恋恋不舎（好きで好きで忘れられない）――姚敏と陳歌辛は3人の秘恋、そして悲恋を「未嫁時」と男女を逆転させて、李香蘭に歌わせたのだった。そして、李香蘭は2人の気持ちをしっかりと受け止めていた。陳歌辛の子息で、音楽家として現在も中国で活躍する陳鋼に山口さんはこう語ったことがあったという。

「もしかしたら、貴女のお父様と一緒になっていたのかもしれないのよ」

山口さんに上海時代、香港時代の事績をもっともっと聞いておけばよかった、後悔の念が頭をよぎったが、全ては後の祭り、山口さんも姚敏も陳歌辛も亡くなった今となっては全ては闇の中である。

「七大歌后の中で一番若くてミソっかすだった私だけが残っちゃったのね。李香蘭は全然違ったわ。押しも押されもせぬ大スター、私の憧れの的だったの。歌は私や周璇と違って本式だし、北京語も日本語も英語もお芝居も上手だったし。李香蘭が死ぬ前に会いたかった、何で東京に行かなかったんだろう。どうして香港に来てくれなかったんだろう」

姚莉さんは湯気が立つこともなくなった点心に全く箸をつけようとしない。

「私も早く李香蘭に会いに行きたいわ……」

どうやって励ましたらいいのか、焼売を口に運び茶をするふりをして言葉を探していると、天上の山口さんから言伝てが届いた。

「姚莉姐さん（中国語では年長の女性を姐と敬意を込めて呼ぶ）、そんなことしたらお兄さんも李香蘭も怒りますよ。これから陳歌辛と一緒にこの世でやり残したことをしようとしているのに、姚莉が来たらできなくなっちゃうじゃないか。まだ暫くはこの世にいなさい、って3人とも口を揃えて仰ってますよ」

天上から李香蘭の励ましの言葉を聞い

て、しばし黙っていた姚莉さんの表情には漸く笑みが見え始め、冷え切った点心に箸を伸ばしたのだった。

3冊の自伝と上海、香港

山口さんは生前、3冊の自伝を著した。『李香蘭　私の半生』（藤原作弥共著。新潮社、1987年7月20日）、『戦争と平和と歌　李香蘭　心の道』（東京新聞出版局、1993年9月15日）、『「李香蘭」を生きて』（日本経済新聞社、2004年12月7日）である。藤原作弥との共著である『私の半生』は戦後40年余しかたっていない1987年に発表され、噂では耳にしたことはあっても真相はまだ厚い神秘のベールの中にあった山口さんの前半生を初めて公にした大作である。

山口さんは取材後の原稿チェックには極めて厳しい人だった。山口さんから聞き書きをしたさる映画評論家は、その厳しいチェックに音をあげて発表を断念しかけたと書き残しているほどである。初めての自伝執筆の際に配慮しなければならない点は現在の比ではなく、藤原作弥氏の受けたチェックは映画評論家とは桁違いに厳しいものであったろう。『私の半生』に山口さん自身が書き残しているように、映画「白蘭の歌」「支那の夜」「熱砂の違い」のいわゆる大陸3部作を山口さん自身が目にして、数日も眠れなくなるほどの衝撃を受けた中、2人は涙も干上がるほどの厳格なやり取りの末に事実を確定、初の自伝を書き上げた。その完成度は極めて高く、李香蘭欽定史と言っていい。

この後の2冊は欽定史である新潮社本のそれぞれ6年、17年後に出版され、その間の山口さんご自身の変化や新たな発見が補遺として加えられている。東京新聞本には3期18年に渡った参議院議員生活の後のものだけに、訪朝時の歓迎宴で金日成（キムイルソン）から「蘇州夜曲」をリクエストされたエピソードなど山口さんならではの各国首脳との交遊が、日経本には山口さんの幼馴染であり命の恩人であるロシア人、リューバの兄が戦時中、日本軍に捕らえられ、731部隊の犠牲になったという衝撃の事実をNHKのドキュメンタリー取材で訪れたロシアでリューバとの再会の際に知らされ、自らの身を切られるほどの痛みと苦しみを味わったことなどが書き加えられている。この3冊からはアジア最大の歌手、女優から戦後、世界の大舞台、銀幕へと羽ばたいたばかりか外交官夫人、ジャーナリスト、国会議員と一身にして三世も四世も生きた山口さんの前半生が一瞥できる仕掛けになっている。しかし、その史実の多くは新潮社本が基底をなしている。戦後の後半生を聞き書きさせてもらいたいと相対した時も、戦後の事柄であるにも拘らず、回答の多くは新潮社本の中そのものか、そこから派生したものが殆どだった。山口さんとの共通点であった花より団子以上に、後半生の聞き書きを断念せざる得なかった重大な原因だった。

この3冊は上海時代、特に香港時代への言及が極めて少なく扱いが冷淡である。『私の半生』の15の章立ての内、第12章「萬世流芳」、第13章　夜来香ラプソディー、第14章　上海1945、第15章　さようなら、李香蘭と後半の4章が上海時代に当てられ、量的には十分にも見える。それなのに冷淡さを感じざるを得なかったのは、山口さんが時折口にされていた上海、香港時代への深い郷愁が行間から伝わって来ず、単なる回顧に終わっていたからだった。山口さんの上海、香港への思いは深く、熱いものだった。

「私は上海で『萬世流芳』を撮って初めて中国の女優になれたのよ」

李香蘭は1938（昭和13）年、満映作品「蜜月快車」で銀幕デビューを飾り、

長谷川一夫と共演した「白蘭の歌」「支那の夜」「熱砂の誓い」の大陸３部作でスターダムにかけのぼった。しかし、映画が公開されたのは満洲と日本、日本海を跨いだ2本脚のスターでしかなかった。当時、東洋のハリウッドと謳われたアジア随一の銀幕の都、上海で李香蘭主演映画が上映されたのは虹口日本人居留区の邦画館にしか過ぎず、観客も殆どが日本人であった。「支那の夜」が上海の封切館で上映されたのは43（昭和18）年のことである。

『萬世流芳』を撮って初めて中国の女優になれたのよ」

「萬世流芳」は英国と戦う林則徐と3人の女性を主人公に、川喜多長政率いる中華電影と上海一の大プロデューサー、張善崑が阿片戦争百年を記念して製作した大作である。日本はこの映画の中で交戦中の敵、英国を相手に見据え、観客である中国人は英国を日本に読み替えた。川喜多と張の2人が借古諷今手法で日本軍、重慶側の両方を見事に謀って世に出した労作でもある。

山口さんのこの一言は、上海の当時のトップ女優、陳雲裳、袁美雲らと「萬世流芳」に主演し、山口さんの歌う挿入歌「売糖歌」が重慶、延安を含む日本軍非占領地域でも大ヒットしたことを物語っている。日本や東京を座標軸に置いた思考では想像がつかないことかもしれないが、中国だけではなくアジアの映画の中心だった上海を中心に据えれば、辺境にしかすぎない満洲と海の向こうの日本で人気を博している満映女優、李香蘭が東洋のハリウッドにいよいよ登場、さてお手並み拝見というところだったのだろう。その期待に応えたどころか、李香蘭は陳雲裳、袁美雲ら中国のトップ女優と伍して見事の演技を見せ、甘く切ない歌声は全中国だけではなく華僑の多い南洋の地まで鳴り響いたのだった。また、山口さんご自身にしても満洲新歌謡の歌い手となって全満洲に向けて歌った曲目の中に、当時の上海の流行歌、映画主題歌が少なからずあり、銀幕デビューの前から芽生えていた上海への憧れが現実の毎日となった生涯忘れえぬ作品だった。『私の半生』にかかれているように、当時の上海一の大歌手にして大女優、周璇とは山口さんの持ち歌「夜来香」のレコーディングの際に劇的な出会いをし、その後も親密な交友を重ねたという。周璇の遺児、周偉一家が亡母が遺言で必ず訪ねるように言い残した、と山口さんを表敬し、ミュージカル「李香蘭」をともに鑑賞したのは戦後60年を翌日に控えた２００５年８月14日のことだった。周偉は劇中で野村玲子が歌う亡母の「何日君再来」、そして故郷を追われた満洲のゲリラが郷土を偲んで歌った「松花江上」を日本の役者たちが中国語で歌うのを耳にして感涙に打ち震えていた。その年の暮れ、李香蘭の恋人とも取りざたされたことのある台湾出身の汪兆銘国民政府高官、中華電影の幹部だった劉吶鷗の遺児も山口さんを訪ねてきた。中国の客人の席には随分と同席させていただいたが、上海時代に端を発するものが殆どだった。

「引揚げてきてから暫く映画の世界から離れていたのは中国の映画仲間の安否が分からなかったからなの。彼らが香港で元気にしていると分かったから映画の世界に戻ったのよ」

46（昭和21）年、山口さんが上海から川喜多長政とともに引揚げてきてから、48（昭和23）年の銀幕復帰までに暫くの空白がある。この間にはリサイタル、舞台劇などに挑戦していたが、この理由を訊ねるとどこにも書かれていない事実が明らかになった。

「萬世流芳」に出演、制作を担当した少なからぬ上海映画人は戦後、解放後、山口さんと同じように数奇な運命を余儀

なくされる。日本軍占領下の上海に残った中国映画人は日本の国策会社中華電影の下で映画制作を心ならずも続けざるを得なかった。このため、日本の敗戦前後には国民党から、解放前後には共産党から漢奸罪で遡及されることを恐れ、香港などに逃れた。上海映画を代表する大プロデューサーで川喜多の良き理解者、協力者であった張善崑は44（昭和19）年、日本軍憲兵隊に拘束されて釈放の直後に重慶に去り（重慶との密通は公然の秘密だった）、監督だった卜萬蒼、馬徐維邦、李香蘭の相手役だった王引、主演した陳雲裳、袁美雲や姚敏・姚莉兄妹らも香港へと去っている。山口さんは身一つで引揚げ、食うや食わずの焼け跡タケノコ生活の中、上海から香港へ逃れた仲間の安否を気にかけ、彼らの安否が分かるまでは銀幕復帰を控えていたのだという。同じ映画を撮った同志が異郷で所を得ぬ生活を送っているのに自分だけが映画に戻っては申し訳ない、と。何と深い思いだろうか。しかし、44（昭和19）年から引揚げまでの2年足らずの上海時代に、ここまでの深い気持ちを抱かせたのは、「萬世流芳」がこの作品で中国の女優になれたと山口さん自身が代表作と感じていたこと、この作品でともに汗を流した映画人を生涯の友と思われていたからなのではないのか、と察している。

デビュー作「蜜月快車」から4本の満映作品には見どころはなく、人気に火が付いた大陸3部作以降の作品の殆どは日本の映画会社大手と満映の共同制作を看板にしてはいたが、満映は李香蘭をレンタルしただけで、実際は日本の映画会社が制作と言っても差し支えない。そして、満洲でも日本でも、日本人の出自を隠し中国娘を演じなければいけない最も過酷な環境の中にいた。そうした後に訪れた「萬世流芳」撮影組は山口さんにとって初めての中国映画の制作現場であった。日本軍の占領下とはいえ、上海には大戦中の世界が失った自由の残り香がまだ漂っていた。日本人か満人か、最も懊悩していた宿命的なアイデンティティの問題を忘れ、中国の女優になる夢を見、その夢を秒刻みで実現していった場であったのだ。『私の半生』では「萬世流芳」の相手役だった王引は撮影の刹那、李香蘭が日本人であることを看破したが、さり気なく知らぬふりをしてくれた、ともある。現場での喜怒哀楽、そこで流した汗と涙は少なくても山口さんにとっては占領者と被占領者という不幸な関係、国籍と国境を超えたものだった。だから、生涯忘れえぬものとなったのであろう。

上海時代の旧友たちへの深い思いが50年代に山口さんをして香港に向かわしめ、5本の映画主演につながった。そのうちの2本は「萬世流芳」の監督だった卜萬蒼、相手役だった王引が監督しているのである。そればかりではない。香港で山口さんはなんと、李香蘭の旧名に戻って映画に主演し、主題歌や挿入歌のレコーディングをしているのである。

3冊の自伝が上海時代、特に香港時代に冷淡である原因は実はここにあると睨んでいる。『私の半生』の引揚げシーンはドラマチックである。こんな印象的な別離が現実にあったとは今でも信じがたい。事実は自伝よりもドラマよりも奇なり、である。波止場の係官に一度は引き留められながらも漸く引揚げ船に乗船。遠ざかっていくバンドの摩天楼を眺めていると、船内放送で「夜来香」が流れてくる。そして、決別をするのである。「さらば中国、さらば李香蘭」と。何も知らぬ少女だったとはいえ、聖戦と御国のためを信じてやってきたことの殆どがまやかしだったと知った時、決別は当然の決断であった。自分が良かれと思って滅私奉公してきたことは、生を受けた愛する国、中国への侵略の文化的な先兵に

しかすぎず、敗れてみれば知らされることのなかった大陸四百四州での日本の落花狼藉が堰を切ったように暴かれたのだから。

しかし、戦後日本は戦前の軍国主義の過ちへの過度な反省から、左寄りの風を長く吹かせすぎたのではないか、とも思う。山口さんが実は望んでいた李香蘭への回帰をこの風が長く阻んでしまっていた。新潮社本が世に出た87年はまだそんな風が力強く吹いていた。そうした環境の中では李香蘭の旧名に戻って映画を撮り、レコーディングした香港時代を詳述することは過度に戦争責任への反省を知らず知らずのうちに強要されていた山口さんに許されることはなかった。戦前はイノセントな満洲娘を演じることを強要されたのと同じように、戦後40年余が過ぎても李香蘭と決別し、懺悔と反省を続ける山口淑子を求めていた。その真空地帯に上海、香港時代はすっぽりと吸収されてしまい、自伝の中に大きく扱われることはなかったのだ。

しかし、日本人山口淑子として生を受け、そしてある時期、中国人李香蘭を演じていたことは、戦争責任が、また歴史認識がどうあれ誰もが否定できない厳然たる事実である。一身を綺麗に真っ二つに割ることなど誰もできやしない。あの小さい体の山口さんは戦前は出自を偽らなくてはならなかったことで、戦後は李香蘭への回帰を世間が許さないことで懊悩を続けたと言ってもいいのではないか。それを強く確信したのはある酒席でのことだった。紹介しようと連れて行った友人が戦前の上海時代の山口さんのセピア色のブロマイドを探してきて、サインをねだった。友人へのサインを済ませた山口さんは、今度は当方に微笑みながらこう問うてきたのだ。

「折角だから高橋さんにも一枚いかが。山口淑子にする？　李香蘭にする？」

どちらをお願いしたか、それは言うまでもない。李香蘭とさらりとサインしたときの表情は生涯忘れられない。戦前も戦後も一貫して漂っていたアイデンティティの苦界から漸く解脱されたようにしか見えなかった。

山口さんはご自宅での最晩年、上海と香港でレコーディングした中国語歌曲ばかり聞いていたとご遺族から伺った。日本語の曲名、歌詞はつまらないということだけがその理由ではなかろう。その時、山口さんの中には上海の、香港のどんな情景が駆け巡っていたのだろうか。

2015年5月1日、香港文華東方酒店

約束の時間に伝説の大女優、陳雲裳さんが香港サイド最高級ホテルの香港文華東方酒店（マンダリンオリエンタル香港）の珈琲庁に姿を現した。「萬世流芳」公開後ほどなく銀幕を一旦引退した彼女は、香港に居を移し、戦後、張善昆に請われて香港で数本の映画を主演した以外は芸能世界と隔絶して暮らし、新聞・テレビもその姿を伝えることはなかった。原節子以上の神秘性を湛えた伝説の大女優である。

お元気だった頃の山口さんから彼女の連絡先を知らされ、香港訪問の度にご主人のクリニック、自宅に電話連絡をしたが、奥様は海外にという返事ばかりでアメリカあたりに移住したものだとばかり思いこんでいた。しかし、香港に戻っているらしいと友人から知らされ、山口さん逝去直後に自宅に電話を入れるとようやく連絡がつき、半年の歳月を経て面会が実現した。李香蘭共通の友人として彼女の冥福を祈ろうとの趣旨だった。

「李香蘭とは50年代だったか60年代の初めに、スイスで偶然再会したんです。主人と旅行の最中にホテルでばったり」

山口さんの欧州滞在はイサム・ノグチと結婚しながら米国査証を長く拒否され、欧州などを転々とされていた時代か、銀幕を引退後に外交官夫人としてジュネーブにいらしたときのいずれかであろう。

「その後は香港に来ると我が家に泊っていったのよ」

彼女にはどうしても確認したいことが一点あった。『私の半生』に書かれていた彼女の引退に関わるエピソードである。『私の半生』には上海に入港した日本軍艦艇に花束贈呈を要請された陳さんはこれを拒否したものの、一切報道しないと軍側の妥協したことから応じたところ、翌日の新聞が大々的に報道。脅迫状が殺到して、銀幕引退の大きな原因になったと書かれている。

「そんなことはありません。私は主人と結婚したから引退したんです」

陳さんは『私の半生』の一節をきっぱりと否定した。

「日本軍からそうした要請がよくありました。拒むことは難しかった。今は時代が違うから分かってもらえないかもしれないけど。時代が違ったのよ」

「時代不同」という一節を陳さんは何回も繰り返した。占領者、日本軍の要請は泣く子と地頭のようなもので断れば身に危険が及ぶ。しかし、これに応じたことが世間に知れ渡れば漢奸、売国奴として同胞から厳しく指弾される。日本占領時代の上海は中国人にとっては退くも地獄、進むも地獄の世界だった事実が「時代不同」という言葉には含まれている。

「李香蘭は北の生まれ育ちだから北京語も広東生まれの私とは比べ物にならなかったし、日本語も達者だったから、軍との間に入って、そうした要請を何回もとりなしてくれたわ。歌も上手だったし綺麗だったし。何よりも本当に優しい人だった。寂しい、もう一度会いたかった……」

『私の半生』には翌日の新聞に写真付きで報道されたという具体的な事例が記されている。そこで、上海の友人に新聞資料を捜索して貰ったところ、上海档案館には李香蘭ファイルは存在するものの、その中の公開資料はごく少なく、花束贈呈に関するものは一切なかった。また、新聞資料を捜索しても陳さんが花束を贈呈した事実も、その該当時期に日本軍艦艇の上海入港の確認ができなかったという意外な回答が戻ってきた。

陳さんの発言が事実だったと判断せざるを得ない。満人を演じさせられた李香蘭、山口さんは陳さんら中国人同業者の置かれた環境を単なる日本人よりも容易に理解できたことであろう。陳さんの言う通り、彼らの立場を思った山口さんが軍側とのとりなしに奔走したことは事実であろうし、その気持ちの強さが陳さん引退の理由を軍による花束贈呈の強要に結びつけたのではないだろうか。それは山口さんにしかなしえない美しき誤解である。

国策映画、漢奸裁判などの謎

山口さん逝去から1年余り、前半生を辿ってみたが、この花束贈呈事件だけではなく、いくつかの謎が浮かび上がってきている。山口さんが生涯悔やんだ大陸3部作の国策映画批判に関して、ある友人が内閣情報局映画審査部門の資料を渉猟したところ、大陸3部作は商業主義に走った映画屋どもが売らんかなで作ったメロドラマに過ぎず、国策映画を徹底させる第一対象であるという衝撃的な資料が発掘されている。山口さんの深い悔悟とは裏腹に、当局は全く時局認識に乏しいメロドラマと断じていたのである。

また、ミュージカル「李香蘭」でも最大の見せ場である上海軍事法廷判決言い渡しのシーンに関しても、実は資料的な裏付けができていない。上海の友人が裁

判資料も併せて渉猟してくれたが、起訴状、判決文とも全く見つからないという。中華電影に関係した中国映画人、音楽家は日本の敗戦後、漢奸罪の容疑で取り調べを受けている。汪兆銘南京政府要人で中華電影の名目上のトップ２人だった褚民誼、林柏生は死刑判決を受けているが、映画監督、俳優、音楽家で起訴されたものはいない。これは中国映画史の中で史実として確定している。

『私の半生』は87年に刊行され、当時は中国の歴史資料捜索のハードルが今よりも遥かに高く、山口さんの記憶をもとにした口述の裏付けを取ることは遥かに難しかった。それは時代の制約そのものだろう。しかし、花束贈呈事件、漢奸裁判資料の資料捜索の結果が物語っているように、『私の半生』に書かれ、ミュージカル「李香蘭」最大の見せ場も花束贈呈事件と同じように山口さんの強い贖罪意識が生んだ美しき誤解であった可能性が極めて高い。

美しき誤解は美しいまま後世に伝えるべきなのか、美しき誤解を再度検証すべきなのか、未だに思い悩んでいる。しかし、最近は美しき誤解を解き明かすことこそ、李香蘭を捨てることを戦後の政治の風に強要された山口さんの本当の思いを知る唯一の道なのではないかと考えている。しかし、李香蘭関連の資料は中国国内では多くが公開されておらず、満映作品は封印されたまま。50年代に香港で撮影された映画５本の内、東宝との共同制作だった「白夫人の妖恋」以外はフィルムが散逸したままである。資料は余りにも少なく、生前の山口さんを知る人は何人も残されていない。

生前、山口さんは「あのリサイタルは生涯忘れられない」と繰り返し懐かしんでいた伝説のリサイタル「夜来香ラプソディー」（45年６月23日から25日、上海大光明大戯院）の幻のスコアの一部を服部良一氏遺族から拝借できたので、これを元に上海、香港で新たな事実の発掘を試みようと考えている。

（２０１５年10月８日・公開フォーラム）

講師略歴（たかはし　まさはる）

早稲田大学文学部卒業、中国留学の後、東京新聞記者を経てＴＶ朝日へ。ニュースステーションディレクター、台北支局長、サンデープロジェクトチーフディレクター。

２００７年には日中初の生討論番組となった「朝まで生ＴＶ」プロデューサー。「李香蘭の秘めた恋」（「文芸春秋」誌２０１４年12月）などを発表。